

内村鑑三はどのように聖書を読んだのか

日本の聖書学、その歴史に於いて、内村鑑三を始まりとする無教会主義者のグループは少なからず貢献してきたと言ってよいだろう。内村自身その名も「聖書之研究」という雑誌を創設・主宰し、聖書研究・聖書研究会という用語・概念を定着させた上でも大きな役割を果たしている。

それではその内村鑑三は、どのように聖書に向き合っていたのだろうか。果たして、聖書学者的な読み方をしていたのかというと、必ずしもそうとは言い切れないのが面白い所である。何故かと言えば、内村は聖書を読む際、基本的にはそこに書かれている通りに理解しようとするからである。「(聖書は)読めばわかる」というのは彼の姿勢を端的に表した言葉のひとつである。但しだからといって、ただ無闇に読めばよい、というのではない。内村は聖書の無謬ということを考えているわけではないのである。内村が自己問答形式で書いた、以下の引用文を読んでいただきたい。(傍点は筆者による)

問 さらば貴下は、聖書は一言一句、誤りなき神の言であるとお信じなさるのでありますか。

答 そうであります。ある意味においては、私は聖書の辞句的インスピレーションを信じるものであります。

問 ある意味にてと仰せられるのはどういう意味でありますか。貴下は聖書に書いてあることは何でも動かすべからざる真理であるとお信じなさるのでありますか。

答 そうであります。神に関すること、人に関すること、罪に関すること、救済に関することについては、聖書は最終の憑典であると思います。

...(中略)...

問 さらば貴下は、聖書に書いてある科学上の事実や、また歴史上の事実は、これもまたことごとく信ずるに足るものであるとお信じになるのでありますか。

答 ある意味においてはそうであります。ある他の意味においてはそうではありません。聖書は宗教の書であって科学や歴史の書ではありませんから、聖書の記事は宗教的にはまうたく信憑すべきものであります。

問 宗教的には信ずべきであるとはどういうことでありますか。宗教的事実であることはかならずしも科学的には事実ではないとのことでありますか。

答 そうであります。物にはすべて宗教的の意味が存しております。そうして事物の宗教的意味を示す上においては聖書は少しも誤りません。その意味においては聖書は誤りなき神の言であります。

1

この引用文からもわかるように内村は、科学的に考えて矛盾する記事が聖書にあった際、それを科学的には矛盾しないよう解釈して合理化すればよい、と考えているわけではない。それでは、科学を唯一の正しい枠組であると考え、それに宗教的な文章である聖書をあてはめる、ということになる。そうではなく、科学的には矛盾をきたす部分も含めて、聖書は科学を含む現世的次元・枠組とは別の次元・別の枠組に基づく宗教的な意味をあらわす、と読むのである。

一方で、所謂科学としての聖書学的な知識を否定するわけではない。以下もまた内村の言葉である。

我々は先ず第一に其外形を学ばねばなりません、此書の作られた土地柄や、並びに其時代、其土地の風土、人情物産、其時代の歴史、習慣、言語等、是等の大体を弁えへねば其内に含まれ居る真理の核子を探ぐることは甚だ困難であります。²

内村は続けて「聖書地理」「聖書博物学³」「聖書考古学」「聖書年代記」「聖書歴史」「言語⁴」を知らねば、聖書について深く知ることはできない、と言うのである。

ところが、さらにこれに続けて、聖書は「実験⁵の書」であるから、「心に深き人世の実験を経し人に取ては至て解し易い」書である、とも言っているのである。「基督を十分に解するには、基督のやうに苦しみ、彼のやうに国人や朋友や兄弟にまで捨てられ、終には盜賊と共に十字架にまで釘けられるやうな辛い実験を経なければ」ならない。また「無学であればとて聖書の研究を怠てはならない」が、「然ればとて無学を以て満足しては」ならない。理解の深さ・広さ・高さは神に関する知識により異なるので、できるだけ知識をふやさなければならぬのである。しかしいくら知識をつけたところで、結局そこに書かれたことを「実験」しなければわからない、ということだ。聖書は深い人生経験を通して自然と理解できるようになる、「神の心は単に真心を以てのみ知ることが出来る」のである。⁶

以上のことから内村聖書解釈の特質を簡潔にまとめるならば、二重性、あるいは全体性・トータル性ということになるのではないだろうか。内村の主張は、客観的学問的な知識を土台に、自らの人生経験（実験）を通して得た宗教的な意識を重ねて読むならば、聖書が「宗教的には信憑すべきもの」であるということが必ず自分なりに理解・実感できる、というものだからである。これは、知的要素も感覚的要素もそして生活に関わるような身体的要素も、全てを用いて聖書に向き合え、ということであるのではないだろうか。

なぜ今ここで内村鑑三を扱うのか

「真心のみを以て知ることができる」とは、まるで聖霊的な啓示を重ねるような表現である。しかし、聖書学的研究を続け、その流れから関根正雄のような研究者を生み出したこともまた内村鑑三の業績である。「2つのJ」が、彼にとって両方とも同じ重さを持っていたのと同様に、2つともが彼にとって真なのである。しかしこのような、両方とも本当である、というあり方は、「つきつめていない」とする指摘もあり、内村は常に最後は議論から逃げる、という厳しい評価もする研究者もある。

確かにある一定の枠組を設定し、そこに限定して話を進めたほうがわかりやすいのは言うまでもない。しかし現代の世界状況の中で「唯一の認められた枠組」を設定しようとするのは困難であり、寧ろ複数の枠組の共存を考える方が有効なのではないだろうか。ある出来事がある枠組の中で真でないとしても、他の枠組の中でなら真であるのかもしれない。別にそこで自らの枠組を壊さねばならないわけではないが、自らの枠組しか認めないとなれば摩擦のもとであろう。そしてそれは異文化同志の接触の際に生ずるだけではない。1人の人間の中に複数の枠組が存在し、それが摩擦を起こすこともまたあることである。特に科学的、論理的枠組が支配的である現代日本社会の中で、その枠から外れてくる宗教のような事柄について、あえて扱おうとするならば、「両方大事である」と言い切ってみせる内村のあり方を今改めて考えてみる意義はあるのではないか。

内村の場合、その根本に聖書とイエス・キリストへの徹底的な信仰があるようであるから、彼に聖書やキリストについて本気で批判的に考える気があるのか、と指摘されるとつらいところはある。また彼は説明できなくなると結局「実験」と称して逃げる、と批判することも可能であると思う。しかし彼の真意は、そして宗教的なものの存在意義は、科学や論理では語り得ないものが世界にはあるのだ、ということを示すことではなかったか、とも言えないだろうか。そして理屈や学問が全てを語らないからと言って、それが科学

を否定したり科学の敗北であったり、といったこともまたない。次元が違うだけである。

なお、聖書を批判的視点から読む、ということになれば、いわゆるテキストクリティーク、あるいは聖書学的な立場が考えられるであろう。そして内村が聖書学的な立場を否定するわけではないのは前述の通りである。しかし、聖書学的な、史的な人間イエスと、キリストとしてのイエスとでは、内村の中で明らかに扱いの重みが違うところがあるように思われる。キリスト教を人間イエスによる道徳的教訓として捉えようとするような、当時の新神学的見方に対する反発もあるのかもしれないが、内村は自らの罪意識の強さもあり、キリストの贖罪ということに対する信仰を強く持っている。聖書はあくまでも手段であり、聖書それ自体、すなわち聖書に描かれたイエスの言動がどうか、ということよりも、そこから導き出されるキリストとしての、罪の贖い手としてのイエスの方が、内村の信仰においては重要なのである。

また、「実験」ということについて言えば、実験とは個人的な経験であり、確かに純粋に同じ経験を他者が共有することは不可能であろう。しかし相似的なものであれば、おそらく同じようなプロセスが他者の人生においても反復可能である、と内村は考えているのではないだろうか。

内村鑑三の「路加伝講義」

ここで手がかりとするのは、内村鑑三が大正6年(1917年)1月から『聖書之研究』に連載した「路加伝講義」⁷である。これを用いて具体的に内村の二重性について見てみたい。路加伝講義を選んだのは、ここで内村が科学性や史実性と宗教性について積極的に語っているからである。

中でも特に、内村が奇蹟ということに言及している第一回、第六回及び第十六・十七回を扱ってみよう。

第一回 医家の証明⁸

処女降誕によるキリストの出生という奇蹟をどう考えるか、がこの回を中心である。

キリストの奇蹟的出生を伝えたルカについて、内村は以下のように述べる。

希臘人であって医師であった、而して希臘当時の医師は今日吾人が想ふが如き無智無学の者ではなかつた、すべての学問が希臘人を以て始まりし如くに医学も亦彼等を以て始まったのである。⁹

ルカは医者であり、また立派な教養人であり、迷信を信用するような人間ではない、ということだ。また内村によれば彼は「ヘロドタスの迹に従ひし」歴史家でもある。ただしこの歴史家であることについては「彼の著作なりとして伝へらるゝ路加伝と使徒行伝とは何の方面より見るも立派なる歴史である」と述べられるだけで、特にそれ以上論証されるわけではない。ルカ伝冒頭(1:3)の「諸の事を詳細に考究ねたれば¹⁰」という言葉について、内村は「是は記事の出所に遡り深き研究を経て後に作りし著述である」とする。そして次のように述べる。¹¹

ルカは茲に小説を作らんとしたのではない、真面目なる歴史を書かんとしたのである、故に研究の労を惜まず、研鑽交渉の結果に成りし者が路加伝である、科学的教育を受け、史学的観察力に富みし此人に由りて成りし此歴史は彼が之を世に与へんと欲せし其精神を以て受け取らるべき者であつて、実に古代歴史中最も信頼に値ひすべき者である。¹²

若干大げさな言い方ではあるが、これは内村が好む表現技法である。彼は「これはきちんとした教養のある人により、科学的歴史観に基づいて書かれたものだ」と言いたいのである。

さらに、「然るに此歴史的著作は直にキリストの出生に関する記事を以て始まつて居るのである¹³」と内村は続ける。

ルカが歴史眼を具へたる人でありしことは冷静なる歴史家英のラムゼー¹⁴、独のハルナック等の等しく認むる所である、四福音書中近世史学の立場より見て最も歴史的なるは路加伝である、而して此路加伝がキリスト、奇蹟的出生の記事を以て始まつて居るのである、是れ史学上見逃すべからざる大事である…。¹⁵

ルカ伝は歴史的叙述なのであるから、イエスの誕生も歴史的事項である、という論法である。もちろんこのような論法には無理がある。ラムゼーやハルナックが認めているのは、ルカに史学的歴史観がある、ということに過ぎない。これでは、「有名な美食評論家たちが認めるフランス料理のシェフが調理しているならばラーメンもフランス料理となる」と言っているようなものではないか。誰が調理しようとラーメンはラーメンであろう。

続けて内村が挙げるのはケリー博士¹⁶の談話である。「外科医術の世界的権威」であるケリー博士、「此産科医学の世界的オーソリチーがキリストの奇蹟的出生を確信し之を唱導して止まない」のだという。これもまた先の例と同様である。ケリー博士が医学的に処女降誕を説明してみせた、というわけではない。従ってこのこと自体は別に処女降誕が科学的であるという説明にはならないだろう。それについては内村自身も「彼は勿論此事に関する医学上の説明を供へない、其事は不可能である」と、ことわっている。内村がケリーの例を挙げることで、奇蹟物語の説得力を増すように狙っているとすれば、これでは説明にならない。そうではなく、このことは科学的人間も奇蹟を信じることができる、ということの実例なのである。ここでの「信じる」とは、もちろんそれが科学的に事実であるとして信じるのではなく、この出来事から宗教的にポジティブな意味を見出すこと、とでも言えばよいだろうか。そして内村は以下のように続ける。¹⁷

然し乍ら医師としての彼の立場よりして同業者ルカに対し深き同情を表し神の子イエスキリストが人類の救主として其聖職を果さんがためには、ルカが記せるが如き方法に由りて生まるゝの必要ありしことを大胆にかつ明白に述べているのである…¹⁸

さらに内村は言う。

…キリストの奇蹟的出生を伝へし者は医師、而して医学速進の今日、此事を唱へて躊躇せざる者もまた医師である 青年よ、小神学者よ、汝等は容易に学者の批評を聞いて汝等の信仰に動揺を来すべきではない 学問の上に学問がある、而して深き学問は常に信仰と一致する。¹⁹

内村は折角別次元に信仰と学問とを分けておきながら、自ら再度それを重ね合わせて、しかも信仰が学問と同じ線上にあり、かつ学問より深いものであるかのように書いてしまっている。これでは内村は無茶な理屈をこねている、と批判されても仕方ないかもしれない。しかし内村の真意は寧ろ「学問的でないと批判が宗教的なことを否定することにはならない」ということではないのだろうか。続いて第六回における奇蹟の解釈から、再度このことを確認してみたい。

第六回 奇蹟の一日²⁰

ここで内村はルカ4章の奇跡²¹物語について語る。会堂で汚れた悪霊に憑かれた人を癒し、シモンの姑の熱病を癒し、さらに多くの人々の病を癒した、という奇跡治癒のくだりである。

悪霊についての内村の見解は独特であるので引用しておく。

「汚れたる鬼の霊に憑れたる人」とは如何なる病人を言ふのである乎、後の記事に徴するに其疾病発作の状況は所謂癲癇（エPILEPSIS）に類似している、然しながら聖書が単に一種の疾病と言はずして特に「鬼」又は「悪鬼」と明言せるは何か理由がなくてはならない...キリスト来り給ひし時に特に悪魔が跋扈したのである、...凡て光明の輝く時には暗黒も亦一入（ひとしお）烈しくなるのである...「悪鬼に憑かれし」とは蓋し神の子の出現に伴ふ特別の疾病であつたらう。²²

癲癇に似ている、と言いつつも、「しかしそれは同時に悪魔の働きでもある」と言うのである。独特の二重性解釈である。そして科学的・合理的解釈に対しては以下のように言う。

奇跡の問題は今や既に古びたるが如くなるも実は最も重大なる問題である、.....而して之に種々なる説明註釈を附し或は之を心霊上の出来事の謎と見て無事に通過し去らんとする者が多い、彼等は聖書を読み奇跡以外の教訓より生命を得んと欲するのである.....然しながら真の信者に取ては爾うではない、イエスキリストを神の子と信ずる者、万物の造主が肉体となりて我等の間に降り世の罪を除き給ふたのであると信ずる者は奇跡を見て怪まないのである、奇跡は神の子にふさはしき当然の事である...²³

また前述のケリー教授の言葉を引用し、「『人或は問はん汝医家にして尚之を信ずる乎と、然し余は之を信ずるのである、.....聖書は人が復活の奇跡を行ひたりとは言はない、聖書は神が復活せしめ給へりと言ふのである...』と、是の如くして彼ドクトル・ケリーは奇跡中の最大奇跡たる復活を信じて少しも疑はないのである...²⁴」と言っているが、これもまた科学的に矛盾があることを理由に奇跡を信じられない、という考え方に対して、科学と矛盾するから信じられないと決めつけなくてもよい、という提案と解釈できるだろう。

事実、内村自身が聖書に記されているような奇跡的治療そのものを文字通りに信じているかどうか、という点とまた別なものである。少し長いが再度引用する。

...神愈説の欠点は肉体の治療を余りに重視するにある、キリスト来臨の目的は此世の苦痛を除かんが為ではなかつた、彼は...死非ず哀み嘆き痛ある事なき完全の世を最後に実現せしめ給ふのである、...而して彼に由て此救済に与りたる者は世に勝つことが出来るのである、仮令肉体の疾病は癒されずと雖も此身此儘にて神を賛美し神に感謝する事が出来るのである 癒されざる事が却て喜びである、靈魂の救済は肉体の治療に勝る事幾許ぞ、...キリストが奇跡を以て幾多の病者を癒し給ひしは彼が万物を服はせ得るの力を有し給ふ事を人に示さん為の实物教育に過ぎなかつた、故に之れ確かに神の力の表現である、然し奇跡そのものが目的ではなかつた、...彼が今日我等を救ひ給ふの方法は之等の奇跡以上である、疾病に在りて之れに勝つ力を与へ給ふのである、是の如く奇跡の記事は其儘に之を納くべきである、同時に又之等の奇跡はキリスト出現の目的に非ずして救済の手段に外ならざりしを知るべきである...²⁵

内村自身がこの5年前に最愛の娘ルツ子を失っていることを忘れてはなるまい。内村の祈りに対して神癒

はなされなかったのである。而して内村がその願いを聞き届けぬ神をどう信じたか、がここには現れている。我々は希望を捨てず、困難に打ち克つことができる。それこそが本当の救いなのだ、と内村は考えたのである。

第十六回 巡回伝道（二）三大奇跡 / 第十七回 生命の制御

ここでは再度奇跡の問題が扱われる。内村の態度は一回・六回と基本的に同一である。まず十六回では「イエスの三大奇跡」について語られる。一つ目は湖の上で風と波を鎮めたこと、二つ目は「レギオン」と名乗る悪霊払い、三つ目がヤイ口の娘の蘇生である。内村はこれらをそれぞれ「其第一は天然²⁶の制御である、其第二は霊の制御である、其第三は生命の制御である²⁷」とする。

悪霊については第六回と同様「一種の精神病」であるとしている。しかし「唯イエスが其風と浪を鎮め又悪鬼を豕に移らしめたりといふに至ては人之を首肯しない、殊に科学者等の前に出で、余は之を信ずと公言するが為には少なからざる勇気を要するのである」と、内村自身この出来事全体の理解困難さを認めている。

28

内村の解説は以下のようなものである。

...イエスに天然を制御するの力ありと為すは新約聖書全体の記事に矛盾せざる事である、...基督教の立場よりすれば宇宙の中心はキリストに在るのである、...故にイエスが自然界の混乱を鎮めたるは聖書記者の立場よりすれば毫も矛盾する処なき記事であつて、又新約聖書を大体に於いて信ずる者の否定すべからざる事実である。

彼(キリスト)が我等の救主たるは...絶大なる力の賦与者たるが故である、...主キリストの再臨、信者の復活、而して万物の復興、之れ聖書が明示する所の最後の希望である、人類の理想たる永遠の平和は茲に至て初めて実現するのである、...万物を己に服はせ得るの能力を有するキリストが自ら降つて新しき造化を行ふのである、彼に宇宙を支配するの力なくして人類全体の希望は虚しからざるを得ない、...奇跡なきキリストは弱きキリストである、我等は能力ある強き救者を要求するのである。²⁹

奇跡を行うから救主だ、というのではなく、救主なのだから、奇跡くらいできて当たり前である、というのである。確かに、奇跡を行うから神の子であると信じる、というのであれば、それはご利益信仰と大して変わらない事になる。そうではなく、救主として信じるから奇跡がおこるのである、と内村は主張する。ヤイ口の娘の蘇生に関する解釈を通して、内村はそのことをさらに鮮明に述べている。

何故にイエス此時衆人を斥け僅に少数者の前に於て是の奇跡を行ひし乎、他なし信仰の行為を為す所に不信は最大の妨害であるからである、...己を信じて祈を供にする者のみ存する時信仰の力は最も能く発揚せらるるのである、...

我等がイエスの生命の主たる事を信ずるは之等個々の事実に由るのではない、イエスの貴き生涯の全体及び彼が我らの表に働き給ひし其力に由るのである、奇跡の証明の必ずしも確實ならざるを憂へない、信仰は信仰である、イエスに生命を制御するの力ある事を認むるは彼に対する全体の信仰の然らしむる処である。³⁰

以上の奇跡物語に関する説明を見れば、内村が奇跡を「信じる」と言う事態は、単に内的・心理的なもの

だけとは考えられないように思われる。人間の外側に何らかの具体的事象がないにも関わらず、人間が奇跡を感じる、というようなことであれば、それは全く内的なことであるということになる。しかし内村の表現に則して考えるならば、ここでの事態をそのように解釈することが適切であるとは考えにくい。やはりある出来事に対して、それを受け取る（そしてその場に立ち会う）側の人間の心理と、外側にある何らかの事態・出来事それ自体とがあり、それらが人間の中で合致するプロセスを、奇跡体験・実験と考えるべきではないだろうか。

ただし、内村が奇跡それ自体を評価し信じているわけではない、ということには注意しておきたい。内村は奇跡ということ、神の子・救い主であるイエスの力が顕われたものと考えているのである。そして奇跡を起こす力を含めた、イエスの救い主としての力全体を信じることにより、我々はそこから徹底的な希望を得られる、と内村は考えているのである。

従って、内村が「信仰により病に打ち克つ」と言うのであれば、それは神の直接的な行いにより病自体が治る、というのではなく、病どころか世界の全てを「治癒」できる強力な救い主イエスとその救済を信じることにより、病に立ち向かえるだけの徹底的な希望を得て、それにより何らかの解決を得る、ということになるのではないか。もちろん、内村が「奇跡を科学的に説明はできない」と言うように、科学的・医学的に見るならば、症状としてはよくなってはいないのかもしれない。しかしその患者とそれに関わる人々の存在全体として見るならば、恐らく何らかの解決を得ることは可能なのではないだろうか。

やはり我々の生きているこの世は、自然法則、科学に支配されているわけである。それは否定もできないし破壊もできない。繰り返しになるが、同じ次元の上で折り合わないからと言って、そのどちらかを捨てるべきだ、ということにはならない。

科学的思考のメリットは同じ条件では同じことが起こる、ということである。それは確かにメリットだ。しかしそれでいくと、例えば同じ食材を同じ調味料・同じ調理法で調理したものは同じ味になるはずである。先ほどの例を用いるならば、同じ麺を同じように茹で同じように調合したスープで食べれば同じラーメンである。しかしそれはどうだろうか。例えば空腹なときに食べるラーメンはそうでない時に食べるラーメンよりずっと美味しいのではないのか。それは「科学的には同じ」はずであるから、味の違いは我々の思い込み・錯覚に過ぎない、ということになるのであろうか。あるいは、時間の感じ方について考えてもよい。時間が常に誰に対しても同じように流れている、というのは科学的な事実である。しかし何かに夢中なときはいつもより早く時間が過ぎ、待っている時はゆっくり時間が過ぎる。いずれも科学的には同質であり、我々の方で「ような気がする」だけである、ということになるが、しかしそれらは我々にとっては何らかの真実ではないのか。内村が「実験」と言うのはこういうことではないか。

内村が提示していることは、このようなことと同じようなものであると考えてみてはどうであろうか。科学とキリスト教が矛盾しない、というのは、キリスト教は科学的にも説明がつく、というのではなく、一人の人間の中でその両方が同時に存在しうる、という意味に解釈してやればよいのではないだろうか。

内村は宗教者であり、自然科学者でもある。確かに「聖書は宗教的には真理である」、という彼の言葉は、宗教的要素と科学的要素を分けていることを示す。しかし、世界は一つ、内村は一人である。内村が世界を見る際の見方が複数あるとしても、見る内村は一人であり見られる世界は一つなのである。科学的に見つめた世界、宗教的に見つめた世界等、世界は見方により様々に見えてくるであろう。しかし内村はそれらの様々な世界像を合わせることができると考えているのではないか。

筆者は先に「内村は一回次元を分けておきながらそれを再度重ね合わせてしまう」と言い、それでは批判

されても仕方がないかもしれないと述べた。しかし実はその重ねることこそが内村の特徴であり、「科学と宗教は一致する」とは、「科学的に見た世界と宗教的に見た世界とを統合することができる」ということだったのでないのだろうか。これはあくまでも重なり合っただけであって、強引に一つの次元に押し込められたわけではないのである。見方の次元が増えただけ、その世界像は豊かなものだと言えはしまいか。

-
- 1 「聖書は果たして神の言なるか」明治 37(1904)年『聖書之研究』48号、岩波書店刊『内村鑑三全集 12』8-9 ページより。
 - 2 「聖書の話」明治 33(1900)年『聖書之研究』1-5号、『内村鑑三全集 8』293 ページより。
 - 3 博物学の実例として挙げられるのは植物(ソロモン大王も野の百合ほど飾ってはいなかった)である。
 - 4 内村は原語で、つまり旧約はヘブライ語・新約はギリシャ語で読むことができた。
 - 5 「実験」は、内村のみならず、海老名弾正など、明治のキリスト教指導者が好んで用いる語である。現代の用法としては「実体験」「実経験」が近いと思われるが、しかしこの語は科学実験の実験とも通じることは見逃せないように思う。
 - 6 この段落における内村の言葉は全て前出「聖書の話」『内村鑑三全集 8』298-299 ページより。
 - 7 「路加伝講義」大正 6(1917)年 1月 10日-8月 10日、『聖書之研究』198-205号、『内村鑑三全集 23』72-163 ページに収録。
この連載の構成は以下の通り。第一回 医家の証明/第二回 初詣(2:41 52)/第三回 基督の出世(3)/第四回 曠野の試誘(4: 1 13)/第五回 最初の説教(4:14 30)/第六回 奇跡の一日(4:31 以下)/第七回 弟子の撰定(5)/第八回 税吏の聖召/第九回 新旧の断絶(6)/第十回 天国の民と其の律法(上)(6:12 38)/第十一回 天国の民と其律法(下)(6:36 以下)/第十二回 福音異邦人に受けらる(7:1 10)/第十三回 パテスマのヨハネ(7:11 35)/第十四回 幫助と感恩(7:36 50)/第十五回 巡回伝道(一)婦人の奉仕、比喻の使用(8:1 18)/第十六回 巡回伝道(二)三大奇跡(8:40 56)/第十七回 生命の制御(8:40 56)/第十八回 ガリラヤ伝道の終局(9:1 17)/第十九回 イエスの自顕(9:18 27)/第二十回 イエスの変貌(9:28 36)/第二十一回 師弟の間隔(9:37 50) 第二十一回に「茲に一先づ惜しき路加伝の講義を終る、稿を更めて再び読者に見ゆるであらう」とある。「路加伝講義」という名前が示す如く、註解の類ではなく講義である。つまり路加伝を題材にした内村の講演(説教)である。
 - 8 『内村鑑三全集 23』72-76 ページ。
 - 9 『内村鑑三全集 23』73 ページより。
 - 10 新共同訳では「すべての事を初めから詳しく調べています」。
 - 11 この段落における内村の言葉は全て『内村鑑三全集 23』73 ページより。
 - 12 『内村鑑三全集 23』73 ページより。
 - 13 同上。
 - 14 Howard A Kelly,M.D.,LLD(1859-1943)
 - 15 『内村鑑三全集 23』74 ページより。
 - 16 Howard A Kelly,M.D.,LLD(1859-1943)
 - 17 この段落における内村の言葉は全て『内村鑑三全集 23』75 ページより。
 - 18 『内村鑑三全集 23』75 ページより。
 - 19 『内村鑑三全集 23』76 ページより。
 - 20 『内村鑑三全集 23』95-98 ページ。
 - 21 キリストの出生については「奇蹟」と表記しているが、こちらでは「奇跡」と表記している。
 - 22 『内村鑑三全集 23』97 ページより。
 - 23 『内村鑑三全集 23』95-96 ページより。
 - 24 『内村鑑三全集 23』96 ページより。
 - 25 『内村鑑三全集 23』98 ページより。
 - 26 内村の用いる「天然」という語はいわゆる「自然」を指す。
 - 27 『内村鑑三全集 23』135 ページより。
 - 28 この段落における内村の発言は全て『内村鑑三全集 23』135 ページより。
 - 29 『内村鑑三全集 23』135-136 ページ。
 - 30 『内村鑑三全集 23』141 ページ。